

心揺さぶる100年の決勝

東北に初めて優勝旗を持ち帰るという夢は果たせなかったが、仙台育英は高校野球100年の決勝にふさわしい戦いぶりを見せた。序盤に0-4とリードされても3点を返して懸命に食い下がり、中盤には追い付く粘り。そのひたむきなナインの姿は、東北の人々だけでなく、甲子園の大観衆の心を揺さぶった。

仙台育英が3-6で迎えた六回、佐々木監督が「身震いした」と振り返る会場の雰囲気があった。2死満塁の場面で、甲子園のネット裏や内野スタンドなど的一般観客が手にしたタオルを振り回す。「仙台育英コール」が銀傘(ぎんさん)にこたえました。

そして、佐藤将が「球場全体の声援を力に変えて打つしかないと思った」と、中越えに走者一掃の三塁打を打ち、ついに6-6の同点とした。

三塁コーチの佐々木啓太からは、急な追い風に乗って打球が伸

びたように見えた。右腕を思い切り何度も振り回して走者3人を勢いつけ、本塁へと走らせた。「神懸かりな場面だと思った。天国にいる憧れの先輩が風を吹かせ、外野の頭を越えさせてくれたんだ」と

先輩とは、2006年の大会で、佐藤由規投手(現ヤクルト)とバツテリーを組み、11年の東日本大震災で亡くなった斎藤泉さん(当時22)だ。佐々木監督は同じ石巻市出身の先輩の背中を追い、甲子園で決勝の土を踏んだ。「あんな形で追い付けたし、被災地に笑顔を届けられた」と胸を張った。

観客の声援に加えて、本調子でなかったエースの佐藤世を何とかもり立てようと奮起するナイン。参加3906校のうち2校しか味わうことのできない濃厚な時間に最後まで魅了された。佐藤世は、負けたのは残念だが、この雰囲気の中で野球ができたことがうれしかった」と振り返った。(薄葉茂)

(2015年8月21日河北新報朝刊)

①この記事では、見出しに、「心揺さぶる」という言葉が使われています。本文を読んで、「何が」「誰の心を揺さぶったのか」を読み取りましょう。

「何が」・・・ ()

「誰の心を」・・・ ()

②次の3人が3-6で迎えた六回に感じた気持ちを、記事からさがし書き出しましょう。

・佐々木監督「 」

・打者：佐藤将(太)君「 」

・三塁コーチ：佐々木啓太君「 」